

平成19年度病害虫発生予報第3号

平成19年5月10日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病	平年並	平年並
		縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	やや早い	少ない
		ニカメイガ	やや早い	少ない
		イネミズゾウムシ	平年並	少ない
果樹	ナシ	黒斑病	平年並	平年並
		黒星病	平年並	平年並
		クワコナカイガラムシ	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	やや多い
	リンゴ	アブラムシ類	早い	多い
		斑点落葉病	平年並	平年並
果樹全般	ハダニ類	平年並	平年並	
野菜	スイカ	カメムシ類	やや早い	平年並
		菌核病	平年並	平年並
		つる枯病	平年並	平年並
	スイカ・メロン	うどんこ病	平年並	平年並
		アブラムシ類	平年並	やや多い
シバ	ハダニ類	平年並	やや多い	
		葉腐病(ラージパッチ)	平年並	平年並

[参考]

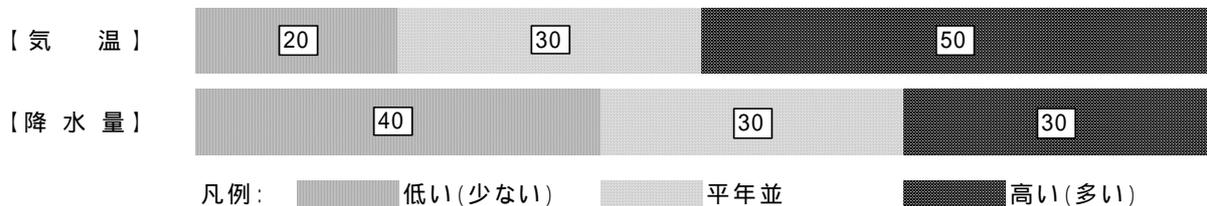
気象予報(抜粋)

1か月予報(5月5日~6月4日:5月4日、広島地方气象台発表)

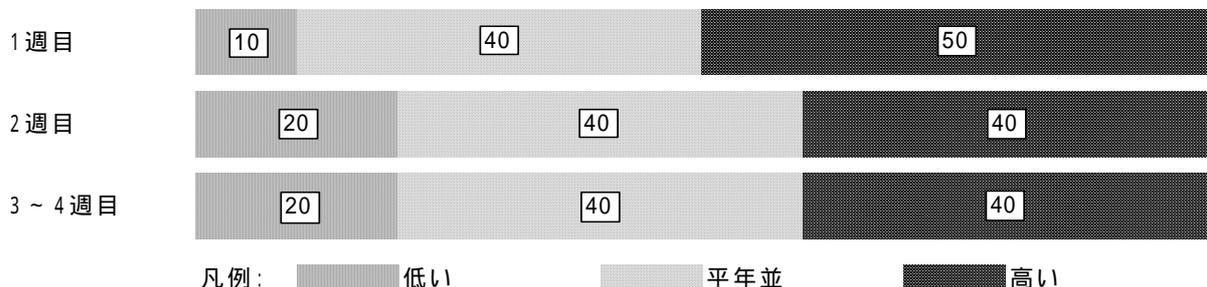
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の前半は平年に比べ晴れの日が多い見込みです。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

【イネ】

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

（2）予報の根拠

- ア 昨年 of 穂いもちの発生は平年より少なく、種子の保菌率は低いものと見込まれる。
- イ 4月下旬～5月上旬の気象条件、および向こう1か月の気象予報は、苗いもちの発生にやや助長的である。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 種子消毒を徹底するとともに、種もみが露出しないように覆土を行う。
- イ 苗におけるいもち病は急激に蔓延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除粉剤または液剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。
- ウ 育苗箱施薬を行う場合は、使用時期及び使用量を守って均一に散布する。
- エ 補植用苗が本田での発生源となることが多いので、補植後の残り苗は速やかに処分する。
- オ 山間部等のいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるので、ほ場の見回り等を行い早期発見に努める。
- カ 県内広域で、シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤（ウィンアドマイヤー箱粒剤、デラウスプリンス粒剤10等）の耐性菌が発生しているため、当該薬剤の使用を控え、代替薬剤を使用する。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや早い
発生量	少ない

（2）予報の根拠

- ア 昨年の本病の発生量は少なかった。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、ヒメトビウンカの発育は平年よりやや早いものと見込まれる。

（3）防除上注意すべき事項

- 県東部等の常発地では、ヒメトビウンカに登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

3 ニカメイガ

（1）予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや早い
発生量	少ない

（2）予報の根拠

- ア 5月6日現在、予察灯への初誘殺は、平年よりやや早い4月30日（倉吉市）に確認された。

イ 向こう1か月の気象予報によると、ニカメイガの発育はやや早いものと見込まれる。

ウ 昨年の第2世代幼虫による被害は少なかったため、越冬量は少ないものと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、局地的ではあるが、発生が増加している地域がみられているので注意する。常発地では、防除指針等を参考にして、ニカメイガに対して効果の高い育苗箱施用剤を使用する。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月6日現在、予察灯への誘殺は確認されていない(平年の初誘殺日は5月8日)。

イ 5月8日現在、平坦部では既に飛翔活動に必要な有効積算温量に達している。また、中山間地域では、平年並の5月中旬～下旬頃に有効積算温量に達すると予想される。

ウ 5月8日現在、県東部の早期(4月下旬)田植ほ場における食害程度は低く(平均被害度 本年:0.5、昨年:1.6)、発生量は少ない。

エ 前年の越冬世代成虫の誘殺数は平年と比較して少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗箱施薬の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ丁寧に粒剤を散布する。

イ 育苗箱施薬を行っていても本田での食害が急増する場合には、追加防除を行う。

ウ 直播栽培などの育苗箱施薬ができない水田においては、本田初期に防除を行う。なお、防除の目安は、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が0.5頭/株以上になった場合とする。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における開花期以降の孢子飛散数は平年を下回った。

イ 5月1日に行った県内15園の巡回調査によると、幼果のポリ袋検定法による発病果率は2.3%(平年:4.1%)と平年を下回った。

ウ 本年のナシ園における病芽および枝病斑などの越冬菌密度は、平年に比べてやや低いが、一部のナシ園では、越冬菌密度が県平均に比べてやや高い園が認められる。

エ 向こう1か月の気象条件から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後、気温の上昇とともに孢子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨直後は孢子飛散数が増加するため、薬剤防除を徹底する。
- イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液、有機銅フロアブル1,000倍とポリオキシシラン水和剤1,500倍の混用液、ポリペリン水和剤1,500倍液など、小袋掛け終了後にはジアリン水和剤600倍液などを散布する。
- ウ スピードスプレーヤーによる防除地域では往復または縦横走行を行い、手散布地域では散布むらのないように丁寧に薬剤散布を行う。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、現地ほ場での発病はほとんど認められていない。
- イ 県予察ほ場における開花期以降の果そう基部病斑からの分生子の飛散数は平年を下回った。
- ウ 向こう1か月の気象条件から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出し処分する。
- イ 薬剤は、ユニックス顆粒水和剤47の2,000倍液、ジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトまたはパルノックス)500倍液、有機銅フロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1,500倍液などを散布する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 前年度、本害虫による果実被害は平年並であった。
- イ 越冬卵のふ化開始は、ほぼ平年並の5月1日(平年:4月30日)であったことから、ふ化終期は平年並の5月14日頃が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では2回目の防除時期となる。防除は幼虫ふ化終期と見込まれる5月10~15日を目安に行う。
- イ 薬剤はアプロード水和剤1,000倍液などを使用する。
- ウ 越冬世代は、第1世代および第2世代よりふ化時期が揃いやすいので防除を徹底する。
- エ 薬剤の散布にあたっては、クワコナカイガラムシが集合する枝葉のほか、枝の切り口、粗皮下などにも十分かかるようにする。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア クワオオハダニの越冬卵のふ化初日は、平年並の4月17日(平年:4月18日)であった。
- イ 5月上旬現在、県予察ほ場におけるハダニ類の発生は平年並となっている。
- ウ 現地のナシ園では、クワオオハダニの発生が多いほ場が一部認められる。
- エ 向こう1か月の気象条件は、ハダニ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

クワオオハダニの発生が多い園では、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを散布する。また、カンザワハダニ、ナミハダニの発生が多い園では、コロマイト乳剤1,500倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 早 い
発生量 多 い

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、県予察ほ場におけるワタアブラムシの寄生新梢率は59.2%(平年:10.9%)で、発生時期は早く、発生量が多い。
- イ 向こう1か月の気象条件は、アブラムシ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液などを散布する。
- イ アドマイヤーの使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、年1回の使用とする。

[リンゴ]

1 斑点落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。
- イ 向こう1か月の気象条件から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤の散布間隔は10日程度とし、かけむらのないように丁寧に散布する。
- イ 薬剤は摘果期にマンゼブ剤(ペンコゼブ水和剤またはジマンダイセン水和剤)600倍液など、袋掛け前にはアントラコール顆粒水和剤500倍液など、袋掛け中にはオキシラン水和剤800倍液、ジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトまたはパルノックス)500倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、県予察ほ場におけるハダニ類の発生は認められていない。
- イ 向こう1か月の気象条件は、ハダニ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類による葉の寄生が認められた園では、ニッソラン水和剤 2 , 0 0 0 倍液などを散布する。

[果樹全般]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 予察灯には、平年よりやや早い4月中旬に初誘殺が認められた。

イ 5月上旬現在、予察灯の誘殺数はチャバネアオカメムシ、クサギカメムシともに平年並である。

ウ 県東部(八頭町)に設置した集合フェロモントラップによる4月下旬のチャバネアオカメムシ誘殺数は1頭(平年:0.2頭)で平年並である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 一部のナシ園では、5月上旬頃からカメムシ類の飛来や幼果の加害が認められている。

イ カメムシ類の発生が認められる園では、ジノテフラン水溶剤(アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤)2,000倍液などを散布する。

野 菜

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は15~20の気温で、降雨が続くと発生が多くなる。向こう1か月の気象予報によると、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないように換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、スミブレンド水和剤2,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,000~1,500倍などを散布する。

ウ ハウスではスミレックスくん煙顆粒またはロブラールくん煙剤などを使用してもよい。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、現地ほ場における本病の発生はほとんど認められていない。
- イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 하우스やトンネル内が過湿にならないよう、換気を行う。
- イ 本病は、株元から発病するので、トンネル栽培のスイカの茎葉には雨がなるべくあたらないようにトンネル開閉を行い、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。
- ウ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ペンコゼブフロアブルまたはジマンダイセン水和剤）600倍液、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニール1000の700～1,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、現地ほ場における本病の発生はほとんど認められていない。
- イ 本病は、25前後の気温と適度な湿度で発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。
- イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。
- ウ すでに発病のみられるほ場では、パンチョTF顆粒水和剤2,000倍液、トリフミン水和剤3,000～5,000倍液などを散布する。
- エ つる枯病が発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）における有翅アブラムシ類の黄色水盤への飛来量は平年並である。
- イ 5月上旬現在、現地ほ場におけるアブラムシ類の発生は平年並であるが、一部では発生のやや多いほ場が認められる。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生にやや助長的であり、今後やや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。
- イ 発生初期の防除に努める。スイカのハウス栽培では、着果2週間後までに発生した場合は、DDVP乳剤50の1,000～2,000倍液、その後の果実肥大期にはアドマイヤー水和剤2,000倍液を散布する。

ウ トンネル栽培では、ツル引き誘引時期にチェス水和剤3,000倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤4,000倍液などを散布する。着果後はDDVP乳剤50の1,000~2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。

エ メロンではチェス水和剤2,000~3,000倍液、DDVP乳剤50の1,000~2,000倍液、モスピラン水溶剤8,000倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地ほ場におけるハダニ類の発生は平年並であるが、一部では発生のやや多いほ場が認められる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生にやや助長的であり、今後やや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア スイカ、メロンともに発生初期の防除に努める。薬剤は、バロックフロアブル2,000倍液、ニッソランV乳剤1,000倍液などを散布し、発生がやや多くなった場合はマイトコーネフロアブル1,000倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。

イ ミツバチ交配を行う前には、ニッソランV乳剤の使用は避ける(ミツバチへの影響日数7日)。

[シバ]

1 葉腐病(ラージパッチ)

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、生産芝での本病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

本病は予防散布を基本とするが、すでに、パッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤500倍液0.5L/m²、バリダシン液剤5の500倍液0.5~1L/m²などを、スポット散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果やフェロモントラップ調査結果（シンクイムシ類）などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL：0857-53-1345、FAX：0857-53-5647

E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、6月7日（木）の予定です。